平成28年度
Aライセンス審判員
研修会

１．　国際柔道連盟試合審判規定(2017-2020)改正の要点について・・・・・・・・・・・・　Ｐ．　１

２．　国際柔道連盟試合審判規定の団体戦への全柔連導入について・・・・・・・・・・・　Ｐ．１０

３．　国内における「少年大会特別規定」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ．１１

４．　事例検証資料・・　Ｐ．１３

２０１７．２．１８

国際柔道連盟試合審判規定（2017-2020）
改正の要点

国際柔道連盟発信
2017/2/3

審判規定改正の目的

過去4年間で柔道が、とても前向きな進化を遂げたのは明らかである。リオオリンピックにおける成功は、これを具体的に証明している。ここ数年で選手の技術的な能力は大きく向上した。例えば、大会におけるテクニカルスコアの数は急激に増えた。2015年8月にカザフスタンで開催されたアスタナ世界選手権においては、いくつかの階級において80%以上に上った。

今回の分析は、IJF理事、増員された柔道に関する専門家や柔道ムーブメントに関わるメディア代表者の監督下で行われた。今回の分析を受けて公表された、いくつかの変更や改正された規定が、今後、柔道に、より明快さとダイナミックな動きをもたらすことになると考えている。新しい規定は、各国連盟や20名から構成されるIJFコーディネーション委員会ディレクターからの提案を基に精査され、その後IJF専門家ならびにテクニカル部門のIJF理事により分析された。広く（情報を）共有し、民主的な同意を経て、今回これらの案が採用された。これらは、柔道の根本的な価値、道徳を踏まえて作成されており、我々の柔道が生きたスポーツとして現代の流れに適合し、より多くの観衆を魅了するであろうことを保証するものである。

採用される審判規定については、1月にアゼルバイジャンのバクーで開催された審判・コーチングセミナーで発表された。柔道家、コーチ、ファン、メディアは、IJFユーチューブチャンネル（www.youtube.com/judo）において、1月6日、7日よりバクーのセミナーを見ることができる。

まず、審判員、コーチ、各連盟ならびに大陸の代表者に対し、新しい規定の各ポイントについて講義と実技講習を用いて詳細に説明される。それから試験期間が開始される。試験期間中、新しい規定は必要があれば改正される。この過程により、我々柔道コミュニティーは、次のオリンピック出場資格獲得サイクルを、より最適な審判規定をもって開始することが出来る。ブダペスト世界選手権の終了後に、次回オリンピック出場資格獲得期間に適用される審判規定を決定する会議が開催される。

以下が新しく見直された規定の要点である。

国際柔道連盟試合審判規定（2017-2020）
改正の要点

国際柔道連盟発信
2017/2/3

試合時間

- 男女共に試合時間を4分とする。これは、IOCが男女の公平性を求めていること、ならびにオリンピックにおける男女混成団体戦で試合時間を統一するためである。

スコア

- スコアは、「一本」と「技あり」のみとする。
- 「技あり」には、今までの「有効」も含まれる。
- 「技あり」2つでも、「一本」と同等とはしない（“合わせ技一本”の廃止）。

抑え込み時間

- 10秒で「技あり」、20秒で「一本」とする。

試合の決着

- 規定試合時間（4分）において、試合は「技あり」、もしくは「一本」のテクニカルスコアでのみ決着がつくこととする。
- （直接もしくは累計による）「反則負け」を除き、「指導」（1回目、2回目）の違いだけでは勝者を決定しない。
- 「指導」は、相手のスコアとはならない。

ゴールデンスコア

- 規定の試合時間が終了した時点で、試合両者にスコアがない場合、もしくはスコアが同等である場合、「指導」の有無にかかわらず、その試合はゴールデンスコアに突入する。
- ゴールデンスコアに入る前の規定試合時間内に与えられたスコア、ならびに罰則は、引き続きスコアボードに反映される。
- スコアが与えられた時点で、ゴールデンスコアは直ちに終了する。
- ゴールデンスコア中に「指導」が与えられた場合、与えられた選手が相手よりも多くの「指導」を受けたことになる場合、その試合は終了する。
  （別紙資料　ゴールデンスコア参照）

国際柔道連盟試合審判規定（2017-2020）
改正の要点

国際柔道連盟発信
2017/2/3

罰則

- 指導４ではなく、指導３で「反則負け」となる。
- ３回目の「指導」が与えられた時点で「反則負け」となる。
- 審判の作法や審判への理解を明確にするため、過去に柔道衣の握り方で罰則が与えられていたピストルグリップ、ポケットグリップなどの組み手について、今後は罰則を与えない

組み方

- 標準的でない組み方の場合、直ちに攻撃しなければ「指導」が与えられる。
- ベアハグ（投げるために相手に抱きつく行為）を行う場合は、攻撃する選手が少なくとも片方の組み手を持っていなければならない。組手のない状態において両手で相手に抱き着く行為には「指導」が与えられる。柔道衣に触れただけでは組んでいるとはみなさない。しっかり柔道衣を握っていること。
- 相手の袖の中に指を入れる行為は、今まで通り罰則を与える。
- 攻撃をしようとしない、防御姿勢など柔道精神に反する消極的な行為に対しては厳しく「指導」が与えられる。
- 投技を準備するのに時間がかかることもあるため、組んでから攻撃を掛けるまでの時間を45秒に延長し、それまでに技がない場合は「指導」を与える。
- 脚を掴む行為や下穿きを握る行為については、１回目は「指導」が与えられ、２回目は「反則負」けが与えられる。

国際柔道連盟試合審判規定（2017-2020）
改正の要点

国際柔道連盟発信
2017/2/3

安全性

- IJF では、可能な限り柔道による外傷事例を抑えるため、安全性に関する規定を精査してきた。受が、背中から着地するのを避けるために行う試みについて、頭や首、脊椎を危険にさらす行為があれば、「反則負け」が与えられる。
  選手が「一本」を避けるために故意にブリッジの体勢になった場合、主審は今までのように「一本」を宣告するのではなく、ブリッジの体勢で着地した選手に対して「反則負け」を与える。

  ただし、これにより敗退した選手は、その後に試合（敗者復活戦や 3 位決定戦）があれば出場することができる。
- 柔道精神に反するような行為は直ちに罰せられる。
- 若い柔道家に悪い例を見せないように、両肘が着地した場合には技の効力を認め「技あり」を与えることが出来る。片肘で着地した場合には、技の効力を認めず、スコアとしての評価をおこなわない。

国際柔道連盟試合審判規定（2017-2020）
改正の要点

国際柔道連盟発信
2017/2/3

投技と返し技

- 取の攻撃に対して受が返し技を施した場合、自身の体が先に着地した選手が投げられたこととする。
- スコアを与えるに値する場合、適切なスコアが与えられる。
- 両選手が同時に着地した場合は、双方にスコアを与えない。
- 着地した後に選手が施した技（返し技）については、スコアの対象とはしない。
- 着地後のいかなる行為も寝技とみなす。

国際柔道連盟試合審判規定（2017-2020）
改正の要点

国際柔道連盟発信
2017/2/3

柔道衣

- より効率的に、より良い組み手で組むことができるように柔道衣の上衣はきつく縛った状態の帯の中に収まっていなければならない。さらに、選手は、主審が「待て」を宣告してから「はじめ」を宣告するまでの間に、上衣と帯を素早く正すこと。
- 仮に選手が時間を稼ぐ目的で柔道衣もしくは帯を乱した場合、「指導」を与える。

ワールドランキングリスト

（別紙　IJF RANKING EVENTS 参照）

団体ワールドランキングリスト

- 団体ワールドランキングリストは、大陸選手権大会、世界選手権大会に付与されるポイントによって　構成される。

順位	大陸選手権　付与ポイント	世界選手権　付与ポイント
1 位	700	2000
2 位	490	1400
3 位	350	1000
5 位	252	720
7 位	182	520
ベスト 16	112	320
ベスト 32	84	240

別紙資料　ゴールデンスコア

（試合終了）ゴールデンスコア突入　->　　勝者　白

4分終了時に白、青の両選手にスコアがない、ならびに指導がない（もしくは指導数が同じ）場合

→ ゴールデンスコアにおいて最初にスコアを獲得した選手の勝ちとなる

（試合終了）ゴールデンスコア突入 ->　　勝者　白

4分終了時に白、青の両選手にスコアがない、ならびに指導がない（もしくは指導数が同じ）場合

→ゴールデンスコアにおいて、最初にペナルティを受けた選手の負けとなる

別紙資料　ゴールデンスコア

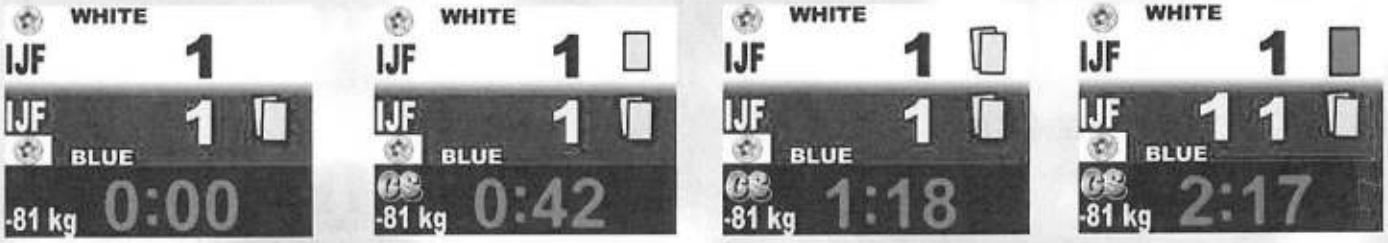
IJF Referee & Coach Seminar

(試合終了)ゴールデンスコア突入 -> 試合継続 -> 白の勝ち

4分終了時に白、青の両選手が同スコア、白に指導1が与えられている場合

→ゴールデンスコアで最初に青が指導を受けた場合、両選手が指導1で並ぶので試合は継続される
ゴールデンスコアで最初に白が指導を受けた場合、白の負けとなる
ゴールデンスコアで両者に同時に指導が与えられた場合も、白の負けとなる

→両選手が指導1で並んだ後、次にペナルティが与えられた場合、与えられた選手の負けとなる



(試合終了) -> 試合継続 -> 試合継続 -> 青の勝ち
ゴールデンスコア突入

4分終了時に白、青の両選手が同スコア、青に指導2が与えられている場合

→ゴールデンスコアで最初に白が指導を受けた場合、白が指導1・青が指導2となり試合は継続される
(ゴールデンスコアで最初に青が指導を受けた場合、青の敗退となる)

→次の指導を白が受けた場合、両選手が指導2で並ぶので試合は継続される

→両選手が指導2で並んだ後、次にペナルティが与えられた場合、与えられた選手の負けとなる

IJF RANKING EVENTS

	コンチネンタルオープン オープンエントリー	大陸選手権 大陸エントリー	世界ジュニア オープンエントリー	グランプリ オープンエントリー	グランドスラム オープンエントリー	マスターズ トップ16	世界選手権 オープンエントリー
シード:	WRL 上位8名 （国籍は考慮する）	WRL 上位8名 （国籍は考慮する）	ジュニアWRL 上位8名 （国籍は考慮する）	WRL 上位8名 （国籍は考慮する）	WRL 上位8名 （国籍は考慮する）	WRL 上位8名 （国籍は考慮する）	WRL 上位8名 （国籍は考慮する）
試合システム:	準々決勝以降敗者復活 ベスト8	準々決勝以降敗者復活 ベスト8	準々決勝以降敗者復活 ベスト8	準々決勝以降敗者復活 ベスト8	準々決勝以降敗者復活 ベスト8	準々決勝以降敗者復活 ベスト8	準々決勝以降敗者復活 ベスト8
敗者復活戦:	2	2	2	2	2	2	2
銅メダルの数:							
出場選手数: （各階級ごと）	無制限	各国2名まで （各国、合計数が男子9名・女子9名を超えないこと）	各国2名まで （各国、合計数が男子10名・女子10名を超えないこと）	各国2名まで 開催国4名まで （ランキングリスト上位2名）	各国2名まで 開催国4名まで （ランキングリスト上位2名）	無制限	各国2名まで （各国、合計数が男子9名・女子9名を超えないこと）
1位	100	700	700	700	1000	1800	2000
2位	70	490	490	490	700	1260	1400
3位	50	350	350	350	500	900	1000
5位	36	252	252	252	360	648	720
7位	26	182	182	182	260	468	520
ベスト16	16	112	112	112	160		320
ベスト32	12	84	84	84	120		240
1勝利	10	70	70	70	100		200
参加のみ		6	6	6	10	200	20
賞金総額			100,000 USD	100,000 USD	150,000 USD	200,000 USD	1,000,000 USD

「国際柔道連盟試合審判規定の団体戦への全柔連導入について」

平成 29 年 1 月 31 日
公益財団法人全日本柔道連盟
審判委員会

国際柔道連盟（IJF）は、改正した試合審判規定を2017年1月より施行している。

この新たな審判規定をどのように国内大会で適用するかについて全柔連審判委員会において検討し、以下のとおり導入することとした。

国内で行われる柔道大会を団体戦と個人戦に分けて考えてみると、団体戦においては「引き分け」の妙味が伝統的に存在し、IJF の方針（団体戦は「引き分け」がない）とは若干異なるが「引き分け」を残す方向で考える。

【全柔連が定める団体戦の勝敗決定方法】

- 個々の試合においては勝ちの内容に従来の「僅差」を残し、内容順を「一本」「技あり」「僅差」の3種類とし、それに満たない場合は「引き分け」とする。

- 「僅差」とは、双方の選手間に技による評価（技あり）がない、又は同等の場合、「指導」差が2 以上あった場合に少ない選手を「僅差」による優勢勝ちとする。1 差であれば「引き分け」とする。
  - 「指導」数によって勝敗が決する例＝0 対2
  - 「指導」数に差が出ても引き分けになる例＝0 対 1、1 対 2

  ※ただし、IJF 方式にのっとり、試合者A が「指導」2を与えられたが、終盤試合者A が「技あり」を獲得すると技評価「技あり」が優先され時間終了時点で試合者A が勝ちとなる。

- 代表戦は「引き分け」の選手から抽選で 1 組を選び、時間無制限によるゴールデンスコア方式によって勝敗を決する。（先に「技あり」以上の技評価を得た選手が勝ちとなり、先に「指導」を与えられた選手が負けとなる）

- 中学生以下の大会では、従来どおりの「少年大会特別規定」を取り入れて行う。

- 団体戦・個人戦とも大会の趣旨・内容を考慮したうえで、勝者の決定方法や代表戦（任意の選手による等）等の試合方法を別に定めることは可能とする。

国内における「少年大会特別規定」

国内における少年（中学生以下）の試合は、国際柔道連盟試合審判規定に則って行われるが、安全面を考慮し、次の条項を加え、あるいは置き換えたものによって行なうものとする。

1、加えるもの

第27条（禁止事項と罰則）

指導（軽微な違反）

1．立ち姿勢で相手の後ろ襟、背部又は帯を握ること。
　ただし、技を施すため、瞬間的（1，2秒程度）に握ることを認める。
　（注）中学生は、試合者の程度に応じて、後ろ襟を握ることを認める。

2．両膝を最初から同時に畳について背負投等を施すこと。

3．関節技及び絞技を用いること。
　（注）中学生は、絞技を用いることは認める。三角絞は認めない。

4．無理な巻き込み技を施すこと。

5．相手の頸を抱えて大外刈、払腰などを施すこと。

6．小学生以下が、裏投を施すこと。

反則負け（重大な違反）

1．攻撃・防御において、故意に相手の関節を極めること。

2．「逆背負投」（通称）の様な技を施すこと。

第27条（附則）

指導（軽微な違反）

1．〔相手の後ろ襟、背部又は帯を握ること〕関係

①「後ろ襟」とは、柔道衣を正しく着用したときの頸の後ろ側（うなじあたり）の範囲をいう。試合者の一方が後ろ襟を握った後、その襟を引き下げて側頸部にずらした場合でも「後ろ襟」とみなす。

②「背部を握る」の範囲は、目安として肩の中心線に手首がかかるような状態をいう。背部を握った後、柔道衣をたぐりよせて釣り手の一部の指が後ろ襟の内側を握る状態になっても背部とみなす。特例として「後ろ襟、又は背部を握った」状態で、通称ケンケン内股等（内股に限らずケンケンとなる大内刈や大外刈等）をかけることは、〔瞬間的（1，2 秒程度）〕の事項を適用せず、また、その後、連絡した技や変化した技についても、技の効果が途切れるまで継続を認める。

2．〔両膝を最初から同時に畳について背負投等を施すこと。〕関係

両膝を最初から畳につくとは、膝の外側部、内側部も含む。同時はもちろん、ほとんど同時と見なされる場合も含む。技が崩れた結果である場合は反則としない。

3．〔関節技及び絞技を用いること。〕関係

①寝技の攻撃・防御において、脚を交差して相手を制しているだけの状態は、三角絞とはみなさない。抑え込もうと脚を交差して相手を制止した後、絞まっている状態あるいは脊椎及び脊髄に損傷を及ぼす動作と判断した場合は、受傷を防ぐために、早めに「待て」とする。また、通称「三角固」の体勢となった時点で、危

険な状態ではないと判断しても、交差している脚を直ちに解かなければ「待て」とする。交差していた脚を直ちに解けば、寝技の攻撃・防御は継続となる。

②故意ではなかったが、関節が極まった場合は、「待て」とする。

（注）小学生以下は、絞技についても同様とする。

4．〔無理な巻き込み技を施すこと。〕関係

「無理な巻き込み」とは、軸足のバネを利かすことなく、体を利用して倒れ込むようにして巻き込んだ技をいう。

5．〔相手の頸を抱えて施す大外刈、払腰などを施すこと。〕関係

「相手の頸を抱えて施す大外刈、払腰等」とは、明らかに腕を相手の頸に巻きつけて施した場合のみをいう。

反則負け（重大な違反）

2．〔「逆背負投」（通称）の様な技を施すこと。〕関係

例えば一方の試合者が右組み、他方の試合者が左組みの体勢から、右組みの試合者が、正しく組んだ釣り手側の前襟を両手で握りながら、右足前回り捌き又は、左足後回り捌きで技を施し、相手を左方向に一回転させながら捻りを加えて、背中、又は頭から投げ落とす様な技をいう。但し、背負投を施して、相手が技を防御するために反対の肩越しに落ちた場合は含まない。

第26条（抑え込み）附則に次を加える

寝技の攻撃・防御において、脊椎及び脊髄に損傷を及ぼす動作と判断したときは「待て」とする。

2、置き換えるもの

第20条（一本）附則

絞技は、「技の効果が十分現れた場合」を適用し、見込みによる「一本」とすることができる。

3、本規定の改廃は、全日本柔道連盟審判委員会において協議し、常務理事会の承認を得て行う。

付則　この申し合わせは、平成22年5月1日より実施する。

平成23年6月14日 部分変更

平成27年3月31日 改正　平成27年6月1日より施行する。

平成27年11月30日 改正

2016/7/2
全日本柔道連盟審判委員会作成

【事例検証】

以下の事例の場合、主審・副審・審判委員等がそれぞれの立場で、どう判断し、どう対処すれば良いか検証しましょう。

事例：1

＊前提　試合時間３分、団体５人制、タイマーの十の桁が消えるトラブルがこの試合以前に何度かあった。
先鋒戦は赤の「技あり」勝ち、次鋒戦は白の「一本」勝ちで１対１の状態

★中堅戦、２分３０秒過ぎに赤が白を倒し（投技のポイントなし）、その後「抑え込み」が宣告される。
「抑え込み」時間が９秒で「解けた」を宣告した時に試合終了のブザーが鳴る。
主審・副審で合議が行われ、「技あり」を宣告し赤の勝ちとした。

★副将戦の試合中に審判長が審判委員に「９秒で技あり」としていなかったか確認したところ、合議に入っていない為、不明との回答。
副将戦の試合を中断することを避け、継続した結果、白が「技あり」を先取するも逆転で赤の「一本」勝ちとなり３対１で赤チームの勝ちが確定。

★副将戦終了後、審判長が審判委員・主審・副審を集め、時計係に確認したところ「抑え込みは『解けた』の宣告時点で９秒であり、試合終了のブザーは抑え込み継続中に３分を超えていた為に解けた後直ぐに鳴った」とのことで誤審が発覚した。

★審判長が赤チームに中堅戦の「引き分け」への訂正を申し入れたが、抑え込みの前に倒した技が「技あり」であったと解釈していた赤チームが訂正を受け入れなかったため、そのまま大将戦が行われ白が「有効」で勝ち、３対２で決着した。

2017年以後訂正可能

事例：2

＊前提　試合時間５分、団体５人制、副将戦までは白の「技あり」で１対０である。
赤チームは第１試合場からこの試合のため、第４試合場へ移動している。
選手の配列は試合毎に変更可能である為、試合開始前の整列時に掲示板の名前とゼッケンの名前を確認（副審）することとなっている。

★大将戦の試合中、赤のゼッケンの名前と掲示板の名前が違っていることに審判委員が気付き、確認するために試合を止めようと立ち上がる。
審判委員の動きに気付いた一人の副審が立ち上がり、中断を求めた時に赤が技を掛け、白を投げた。主審が「一本」を宣告した。

★合議が行われ、掲示板と名前の違いを確認したところ、選手配列は提出されていたが、試合場を移動する際、引継ぎミスで掲示版が修正されていなかったことが解り修正した。

★審判委員が試合の中断を求めていたとの理由で「一本」は無効と判断、「一本」の訂正動作もないまま試合が再開され、白が一本勝ちし２対０となった。